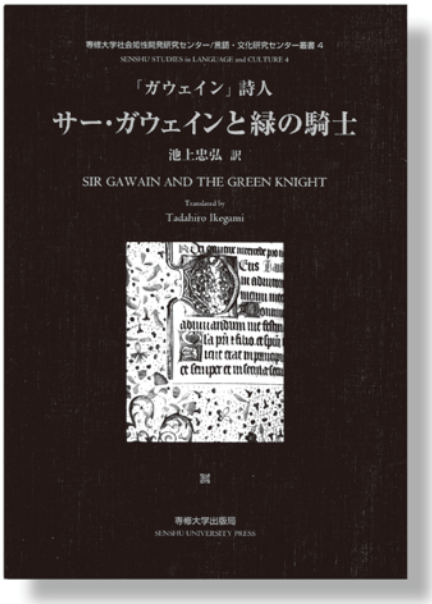

サー・ガウェインと緑の騎士 －「ガウェイン」詩人

池上忠弘訳
専修大学出版局 2009

文学部教授 **松下　知紀**

中世の夜の闇の中で空に輝く星々の中でひときわ明るく輝く星が、作者不詳の『サー・ガウェインと緑の騎士』だと言っても過言ではない。ロンドンのブリティッシュ・ライブラリーに MS. Cotton Nero A. x, Art. 3 という写本（1400 年頃）が一冊収蔵されている。この写本に『真珠』、『清純』、『忍耐』と『サー・ガウェインと緑の騎士』の四作品が含まれている。これらの詩はいずれも中英語の頭韻復興詩である。

アーサー王の宮廷にクリスマスの時期に突如全身緑の出で立ちで登場した緑の騎士は「首切りゲーム」を申し出る。王の代わりにサー・ガウェインが緑の騎士の首を刎(は)ねると落ちて転がった。すると緑の騎士は首を拾って馬で駈(かけ)去った。一年後ガウェインは緑の騎士との約束を果たすために、旅に出る。美しい自然と「互角星形」の楯（寛容、友愛、純潔、礼節、同情心を象徴）を持つガウェインが完徳の騎士として描かれている。次の「誘惑」の場面では、城主の奥方からガウェインが寝室で誘惑され、困惑する姿が浮かびだされる。しかし、この場面は宮廷風恋愛の艶(なまめ)かしさを伝えている。最後に、ガウェインが城主である緑の騎士から「お返しの一撃」を受ける、はらはらする場面である。微罪を除いて誠実なガウェインは首の皮一枚だけ切られただけだった。

この作品はロマンスであるとともにキリスト教的倫理が深く敷き詰められていて、中世の読者ばかりでなく現代の読者にも愛される名作である。